

# アンドレ・マルローの理想と 「中華人民共和国出土文物展」 —冷戦下の中仏文化交流がもたらしたもの

辻 直 美

## はじめに

フランスを代表する文学者として、またド・ゴール政権の文化大臣として名高いアンドレ・マルローは、中国とも「縁」の深い人物として知られている。1927年の上海クーデターを舞台に革命家たちの激闘をえがいた小説『征服者』や『人間の条件』は、進歩的作家としての名を世界に広めたほかに、マルローは反植民地主義者であるとともにコミュニストであり、中国の国民党・共産党の要人たちに接触した、あるいは周恩来をモデルに小説を書いたというような数々の伝説を生んだ<sup>1</sup>。中仏国交樹立の翌1965年には中国を訪問して毛沢東や周恩来ら中国の指導者と実際に会談を行い、この訪問は、当時のメディアを賑わせただけでなく、毛らとの会談がマルローの『反回想録』に詳しく描かれることから、中仏交流史であれマルローの個人史であれ著名な出来事となっている<sup>2</sup>。

本稿は、マルローが1965年の訪中において中国側に「中国美術展」の 파리開催を申し入れたことに着目する。なぜならそのアイディアは1973年より日本を含む世界各国を巡った「中華人民共和国出土文物展」（以下「出土文物展」）へと発展・継承され、この展覧会は70年代初頭の中国の外交政策転換を象徴する文化事業として大きな存在感を示すことになるからである<sup>3</sup>。

マルローはなぜ「中国美術展」の開催を提案し、そのプランはいかにして「出土文物展」に継承されたのか。いわゆるマルロープランの実現は中国やフランスをはじめとする国々にいかなる影響を与えたのか。マルローの訪中については、1949年から69年の中仏関係史をフランスの外交資料に基づいてまとめた高嘉懿が中国側要人との会談を紹介し、文化交流の動向にも言及している<sup>4</sup>。また文化大革命研究の大家である余汝信はマルローと毛沢東との会談に着目し、記録の行間に隠された政治的意図を読み取ろうと試みている<sup>5</sup>。これらの成果はマルローの提案の背景を考察する上で大きな助けとなるものである。ただし議論の焦点があくまで政治・外交の側面に置かれているため、マルローの提案した「中国美術

展」という具体的な計画への記述はなく、70年代初頭のデタントの中で「出土文物展」として復活していく経緯にも触れられていない。本稿では、マルローの提唱がやがて「出土文物展」へとつながる経緯を辿りながら、これまでほとんど言及されることのなかった「文物（美術品）」を触媒とするフランスの中国への働きかけや、それに応えた中国側の意図を分析するとともに、その開催がもたらした意義について検討を行う。

## I. 文化大臣マルローと中国

### 1. マルローの手腕

マルローの中国ないし東洋との関わりは、それが真実であれ虚構であれ、彼自身の思想や行動の源泉の一つといえるものである。マルローのとなえる文明論は「文化の多元主義」や「芸術の普遍性」を基調とするもので、西欧文明の危機を警告したポール・ヴァレリーの「精神の危機」に代表されるように、既存の価値のゆらぐ第一次世界大戦後に活況を呈した西欧論の一つであった<sup>6</sup>。

マルローの文明観はド・ゴール政権における実践に結びついた。1959年1月にフランス第五共和政の大統領に就任したシャルル・ド・ゴール（以下「ド・ゴール」）は、文化芸術を管轄する「文化省」を創設し、側近のマルローを初代の文化大臣に指名した。フランスでは、「世界に寄与すべき無類の価値ある物をフランスが有している」との信念に基づき、文化による対外影響力の向上が、政治・外交の先駆けとして重要視されている<sup>7</sup>。ド・ゴールは著名なマルローの登用によって「文化大国」フランスの拡張をめざし、マルローも信頼するド・ゴールのために情熱をかたむけた。マルローは宣言した。「精神の古い民族であるわれわれにとって、大切なことは過去に逃げこむことではない。…われわれが要求されているところの未来を、創造することである。」<sup>8</sup> マルローは、伝統文化の「再生」に尽力し、パリ市街地の美化や宮殿・寺院の修復、また「文化の家」（音楽ホール・劇場・美術館を併設した総合ホール）の建設など幅広いプロジェクトに取り組んでいった。

マルローの業績の中でも人々の心を強くとらえたのは、レベルの高い美術品を核とする大型展覧会の開催である。インド・エジプト・アフリカ・日本などの美術品を次々にフランス国内に紹介して異文明への関心を高めたほかに、フランスの誇る美術品をアメリカや日本など諸外国に貸し出した。1963年にはダ・ヴィンチの名画「モナ・リザ」をアメリカへと送り込み、大きな反響を呼び起こした。ケネディ大統領夫人のジャクリーンが懇願したというこの出展を、マルローは作

品の安全や政治利用に対する国内の批判を押しきって実現させている。そこには、ベトナム戦争の対応をめぐる緊張する米仏関係を改善したいとのド・ゴール政権の目論見が存在した。

翌64年には日本側の要請に応じて「ミロのビーナス」を日本に貸し出した。東京オリンピックを記念し、日本に対する「特別の友情の証」として送られたビーナス像は<sup>9</sup>、東京と京都の二会場であわせて約172万人を動員するという熱狂を生み出している<sup>10</sup>。

ちなみに陶山伊知郎がまとめるように、戦後日本の美術展草創期(50～60年代)に開催された海外展の多くはフランスからの将来で、日本はフランス式の事業を通して展覧会の手法を学び、これらの成功をモデルとしながら日本の新聞社は大型展の招致にしのを削った<sup>11</sup>。70年代前半に日本で開催された「出土文物展」もその中国版をめざしたものと見え、戦後日本の展覧会様式の形成においてフランスの影響は看過できない。

アメリカや日本における大型展の成功は、マルローの文化戦略の影響力を証明した。マルローが中国を訪問するのは「ミロのビーナス」来日の翌1965年のことである。

## 2. 冷戦下の中仏間交流

マルロー訪中の意味を検討するには、この時期が東西のイデオロギー対立の続く冷戦期であったことに留意せねばならない。大国のアメリカに追随しない自主独立外交を展開したド・ゴールは、とりわけインドシナ問題の解決に心血を注いだ。その目的は、鳥潟優子によればフランス独自の国益観やアメリカとの同盟観にもとづく和平への努力、また森聡によればベトナムにおけるフランスの特権的地位の復活や旧植民地での影響力拡大と、さまざまな解釈が示されているものの、インドシナ問題の解決をめざすフランスが、北ベトナム・中国・アメリカなど紛争当事国との優位な関係性を用いながら、アメリカ軍の撤退やインドシナ中立化のための国際会議実現に向けた仲介を粘り強く継続した事実が明らかにされている<sup>12</sup>。

1964年1月のフランスと中国の外交関係樹立も、こうしたインドシナ問題をはじめとする国際情勢に大きく起因する。フランスにとって、北ベトナムを支援する中国と国交を樹立することは、インドシナ問題の解決に向けた重要な道筋になるとともに、中国との経済・文化関係の発展にも有益であり、さらには中国からの直接情報を対ソ政策やアメリカに対する「外交カード」として使うなどの認識があった。中国側にも、フランスの「二つの中国」問題に対する態度保留を許してまでも国交樹立を急ぐ理由があった。一つはソ連との関係悪化によって失

われた技術援助を西側諸国に求める必要が生じていたこと、また一つはフランスが国連代表権問題での中国支持を表明したことで、フランスとの関係性を後ろ盾に旧仏領諸国などの中国支持を期待したいとの側面があった。フランスとの修好にともない、毛沢東はフランスを「第二中間地帯」の一部と見なし、米ソの二極支配に対抗するための重要なパートナーだと認識するようになる。冷戦下に独自の道を探る中仏両国は、それぞれ互いの存在に利点を見いだしていた<sup>13</sup>。

マルローの訪中はこの国交樹立の翌年のことである。興味深いことに中国側はマルローの訪中前からその活躍ぶりにかなりの関心を抱いていた。中国外交部の管轄する雑誌『世界知識』は、1962年に「マルローに見るフランスの文化政策」と題する記事を掲載し、マルローがブルジョワ階級の人間で社会主義国には敵対的であると批判しながらも、そのイデオログとしての役割を紹介している。

ド・ゴール政権の支柱マルローは、世界的視野を有する外交戦略家としてド・ゴールから全幅の信頼を得ている人物である。……銀行家の家庭に育ち、フランス東洋語学校で考古学と東方学を学んだのち、1923年に考古調査を名目にインドシナを踏査した。25年から27年にかけては中国を訪れ、33年に刊行された『人間の運命』は中国の大革命を背景に据えている。中国の革命に共感を抱いているゆえに……知識人の一部からは「進歩的」な作家、ひいては「左派」だと見なされている。だがそのような煙幕が効果を発揮するのも一時的に過ぎない。……彼は「文化の政治的利用」を強調し、「文明の多様性」や「心理的対策」を重んじながら、「大衆の心を動かす」あらゆる最新のプロパガンダ手法の活用を提起する。そこではとくに「イメージと音」すなわちテレビや映画、ラジオ、絵画等による文化宣伝を有用とする。…フランスは西ドイツや日本と親しい関係にある。東京に日仏文化会館を設置し、61年にはルーブル美術館所蔵の絵画を日本に出展した。<sup>14</sup>

マルローの東洋との関わりや政治思想に着目し、フランスのイデオログとしての力量や文化宣伝の手法を観察するこの記事は、マルローの経歴やフランスの政治外交に対する中国側の関心の高さをあらわすものである。

## II. マルローの中国への旅

マルローの訪中はいかなる旅だったのか。1965年6月22日、マルローは客船カンボジア号に乗りこんでマルセイユの港を出発した。このとき、旅の目的は心身の療養のための私的なアジア旅行で、目的地は日本とされ、日本の新聞社も「訪

日の途につく」と報道していた<sup>15</sup>。ところが、カンボジア号は7月13日にシンガポール沖で事故に遭遇し、それを機に乗客らはシンガポールから各自目的地に向かわねばならなくなった<sup>16</sup>。マルローは15日に香港へ飛ぶと<sup>17</sup>、日本へは向かわずに19日に広東に入る。そこでE・マナク駐中国フランス大使らと合流して、20日夜に空路北京へと向かった。マルローにとっておよそ20年ぶりの北京であった<sup>18</sup>。一方で日本行きはキャンセルとなり、マルローを待つ人々を落胆させたという<sup>19</sup>。

果たして旅の目的は療養で、目的地は日本だったのか。答えは否である。中国側の資料によれば、フランス外交部は国交樹立から3ヶ月余り後の時点で駐フランス中国大使館にマルローの訪中を正式に申し入れていた。これはトップレベルの交流によってインドシナ問題の解決に道筋をつけたいド・ゴールの意向であったが、マルローの受け入れがベトナム戦争の趨勢に影響を及ぼすことを恐れた中国側は回答を留保していた。しかし65年4月、マルローは駐フランス中国大使・黄鎮に中国訪問にかける意欲を語ると、6月22日に前述のとおりマルセイユを出航してしまう。翌23日、フランス側は、マルローが夫人と一名の助手を伴って22日に東方への私的な旅に出発したこと、ド・ゴールはマルローが中国で毛沢東や劉少奇、周恩来ら首脳陣と会見し両国関係や国際問題について意見交換することを望んでいることを中国外交部に告げ、マルローは7月には中国に達するであろうから、速やかに回答願いたい、と要請した。これに対して中国側は6月末、訪問を正式に許可する旨をフランス側に伝えてきた<sup>20</sup>。すなわち中国側の許可を得たことで、航行中のマルローは急遽、行先を北京に変更したのである。

マルローの旅は国交樹立後早期に計画された政治ミッションであり、マルローはその為の特使であった。中国側が受け入れを決断するまで実に1年以上の時間を要したことに、マルローという人物の色彩が如実に表れている。

政府要人としての訪中は、アメリカの「中国封じ込め」政策に対抗する行為としてアメリカをはじめとする西側諸国の不興をかいかねず<sup>21</sup>、またベトナム戦争の調停者とみなされて中国側から拒絶される可能性があった。ゆえにマルローはプライベートな旅を装いつつ中国に向かったのである<sup>22</sup>。

7月21日、マルローはプレスに対して、毛沢東ら首脳陣と会談を行いたい、また延安や毛の生まれ故郷・韶山を訪問したいなどと希望を述べ、さらに次のようなプランを表明した。「パリで大規模な中国美術展を開催する可能性を検討している。……これは中国のためになると考えている。中国が考古学の分野で達成したもの全て、芸術的資源の発展と、特に芸術的創造自体をお見せしたい。これは私が北京で扱う議題の一つである。」<sup>23</sup> マルローが得意とする異文明展の招致計画であった。8月2日、マルローは周恩来との会談にのぞみ、3時間にわたっ

て国際問題から文化交流まで幅広い話題について意見を交わした<sup>24</sup>。本題のインドシナ問題では、マルローがそれとなく、アメリカ軍が撤退すれば中立化への交渉開始は可能かと尋ねたが、周は、ジュネーブ協定への回帰がまず議論されるべきだと主張し、フランス側の提案を頑なに退けた<sup>25</sup>。

マルローは両国の文化交流にも言及し、その中で「中国美術展」のパリ誘致を提案した。このときマルローが「台湾がアメリカで公開しているような」中国美術を……と口にすると、周はその言葉をさえぎって「あれは盗まれたものだ」と不満をあらわにした<sup>26</sup>。国民党の敗走によって台湾にわたった旧紫禁城等に由来する文物（以下「故宮文物」）は1961年5月からおよそ1年にわたって一部がアメリカに出展され、ワシントンなど5ヶ所で開催された展覧会は合わせて40数万人の観客を集めていたが、中国政府はこれを激しく非難していた<sup>27</sup>。マルローはアメリカでのこの故宮文物展を意識しつつ、類似する中国文物展のパリ開催を希望していたのである。冷戦下における故宮文物の存在は、中台間の「唯一の合法国家」をめぐる文化的な争点であった。こうした争点を承知の上で、マルローは中仏共同の展覧会開催をアメリカ＝台湾陣営に対する文化的な牽制とし、また台湾とアメリカの行為に苛立つ中国への懐柔策にすることを狙ったのであろう。

この提唱は、ド・ゴール政権の内政においても重要な意味を持つ。高嘉懿の研究によれば、中仏国交樹立直前の1963年末のフランスでは、中国の政治体制やイデオロギーに対する疑念から、国交に対するフランス国民の支持は決して高くなく、まず経済関係を発展させるべきとの主張の方が強かった。だがド・ゴール政権は国交樹立を強行した。そのため政権にとって今後の世論の動向は、中仏関係の発展を阻害するばかりか、政権の威信すらおびやかしかねない懸念材料となっていた<sup>28</sup>。ド・ゴール政権は、政権運営の安定化のため、フランス国民の対中好感度を向上させる必要に迫られていた。

7月22日に陳毅と面会したマルローは次のように述べている。「フランスは中国を理解せねばならない。……フランスの人々は中国について知る所が甚だ少なく、中国をたんに共産主義政権だとしか思っていない」。マルローは周恩来にも強調した。「我々は接触を増やさねばならない。まず着手せねばならないのは、外交方面ではなく、両国民間の関係を強化することである、互いに相手のことを理解することである。…政治的観点から出発するのではなく、文化の方面から相互理解を進めることが必要である。」<sup>29</sup> マルローは、欧州で人気の高い中国美術をパリに将来するという文化交流によって、フランス人の対中世論を改善しようと企図したのである。文化大臣のマルローが特使として中国にやってきた所以はここにもあった。

フランスの思惑を把握したかは定かでないが、毛沢東らはマルローを歓迎した。

同年8月末に訪中したフランス議会代表団が朱徳とのみ会見したことと比べると、マルローは毛や周恩来、劉少奇、陳毅との会見を実現させ、高い待遇を受けている。前述の余汝信によれば、毛がマルローを歓待したのは、彼が一貫して中国に友好的な人物で、プライベートと称してまで中国に乗り込んできた心意気を高く評価したためとする。むろん先に述べたとおり、中国側にもフランスと手を取り合うメリットがあったのである。毛は、中国が強国になるためには「時間」と「友人」が必要だとマルローに述べ、フランスとの関係強化に意欲を示した。さらに知識人、ジャーナリスト、作家、芸術家、旧地主や旧資本家らすべてが「修正主義者」で「国民党の残党だ」との警戒感をあらわにし、これは奇しくも翌年に発動される文化大革命を予感させる発言となった<sup>30</sup>。

マルローは帰路、香港のフランス大使館で記者会見を行い、訪中の成果を発表した。毛との対談を「現代の最も重要な問題について、それらを絶対的に支配する人物、そして生涯ずっとそうであった知識人との対話だったような気がする」と評価し、毛への執着ぶりを見せる一方で、中国側に提案した「中国美術展」については「中国は世界的に重要な展覧会を開催したことがなく、500点の一流の作品を展示する必要があるため、開催には1年あるいはそれ以上の時間がかかるだろう」と早期実現は困難との見通しを示した<sup>31</sup>。

同年10月1日、フランスと中国はパリにおいて1965年から66年までの文化交流計画となる「文化・科学・技術交流に関する議定書」に調印した。この議定書は、教師・学生・科学的研究員・医療使節団の交換や、文学・ラジオ・テレビ・映画・スポーツなど広範囲にわたる交流の促進を取り決めたもので、中国が西欧諸国との間で調印した初の政府間文化交流計画となった<sup>32</sup>。だがこの中に「中国美術展」計画は言及されていない。基本的事項は中国側の了解が取れており、フランス側は1967年の開催を目標としていたものの、これほど大規模な展覧会の準備にはなお多くの課題が残されており、「引き続き交渉が必要」と判断されたからである<sup>33</sup>。

翌1966年に中国は文化大革命に突入し、「中国美術展」の計画は棚上げとなった。この計画がふたたび組上に載るのは、5年後のアラン・ペイルフィットを団長とするフランス代表団の訪中の際のことであった。

### Ⅲ. 復活をとげたマルローの展覧会計画

#### 1. デタントとフランス代表団の訪中

文化大革命の動乱は中国国内にとどまらず、世界の各地に飛び火した。なかで

も1968年にフランスで勃発した「五月革命」は翌年4月にド・ゴールを退陣させる遠因となり、マルローにもド・ゴールと共に政界を去るという影響をもたらした。リチャード・ウォーリンが指摘するように、文革はフランスにおいて、政権転覆につながる「五月革命」を引き起こしたばかりでなく、左派の学生にとってはユートピア的な未来幻想となり、サルトルやフーコーらメジャーな知識人も惹きつける思想となった。カルチャーの領域においても、「マオ・カラー」と呼ばれる詰襟スーツの流行や、紅衛兵をモチーフとする雑誌の発行、ゴダールの映画『中国女』の人気など、いわゆる「中国熱」を生み出して、これら社会的な文革への関心や熱狂は「マオイズム」と称された。その後の文革の支離滅裂な状況によってフランスの人々の心は次第に文革から離れていったが、一時的とはいえ文革に共鳴した事実は、ヨーロッパの革命的伝統の理念を人々に思い起こさせた。そしてベトナム戦争や核政策をめぐる国際的な緊張に対する反抗心が、相対的に中国を支持する態度となって70年代にも継承されていくのであった<sup>34</sup>。

この1960年代末から世界的な緊張緩和「デタント」が動き出し、冷戦下の国際関係に変化を生じさせていく。69年1月にアメリカでニクソン政権が誕生すると、米中両国は接触に向けた道筋を探り始めた。こうした兆しを背景に1970年7月、アンドレ・ベタンクール計画・地域開発相を団長とするフランス政府代表団が中国を訪問した。中国側はこれを異例の厚遇で迎え、国連におけるフランスの中国支持に謝意を示すだけでなく、資本主義諸国とも「平和五原則に基づいて関係を構築し発展させる」意欲を表明した。中仏両国は貿易や文化など多方面におよぶ交流の発展に向けた希望も共有し<sup>35</sup>、13日の毛沢東との会談では、毛が「アンドレ・マルローが来たのはいつだったか。彼は今どうしているか」と尋ねるような一幕もあった<sup>36</sup>。フランス代表団の訪中の成功は、中国の外交姿勢の軟化と対中関係におけるフランスの優位性を国際社会に知らしめることになった。なお中国国内では、代表団の帰国からおよそ一ヶ月後、中国共産党第九期第二回中央委員会で毛の国家主席就任をめぐって陳伯達が批判され、毛の後継者と目されていた林彪が孤立を深めるなど、その後の「林彪事件」への序章というべき異変が生じることも付言しておく。

翌1971年の春を迎えるとデタントの潮流は加速し、国際政治では新たな動きが展開した。4月に始まった「ピンポン外交」は米中間の関係を緩和させ、同年7月のキッシンジャー訪中へとつながった。同じ7月、中国では1966年の夏以降公開を停止していた北京故宮博物院（以下「北京故宮」）が再開放され、院内の慈寧宮では「文化大革命中の」考古学的な発掘成果を紹介する「無産階級文化大革命期間出土文物展覧」が始まった。

この頃、キッシンジャー訪中と同時期到北京を訪れたのが、アラン・ペイル



フィット元教育相を団長とするフランス議会代表团である。ド・ゴール政権時代に情報相を務めた経験をもつペイルフィットは<sup>37</sup>、十数人の議員やジャーナリストを率いる代表团長として中国各地を回っていた。その訪中記は後に『中国が目ざめるとき世界は震撼する』としてまとめられている<sup>38</sup>。このペイルフィットこそが、マルローの提唱した「中国美術展」計画を再始動させる人物となる。

7月14日、フランス大使館主催のレセプションで、ペイルフィットは周恩来と中仏関係の発展について会話を交わした。ペイルフィットは、「言語の相違はなかなか克服することが困難な障壁になっています。……しかし言語のほかに、中国とフランスとがよりよき相互理解と友好維持のために意思を疎通させよう手段があるのではないのでしょうか。たとえばアンドレ・マルローは1965年の中国訪問に際して、中国芸術の名品を集めた展覧会をパリで行い、パリに続いてロンドン、ブリュッセル、ローマなどでやってはどうかと、中国政府に提案いたしました。この計画をとりあげて実現できないものではないでしょうか」と持ちかけた。周はこの提案に「検討しておきましょう」と応じた<sup>39</sup>。

同代表团はまた、北京故宮で開催中の「無産階級文化大革命期間出土文物展覧」を観覧した。この展覧には10日にキッシンジャーも訪れていた<sup>40</sup>。会場にならんだ満城漢墓で発掘された金縷玉衣などの出土文物を観覧しながらペイルフィットは、一行を案内する文物行政の幹部・王治秋に「これらの発掘品をパリとヨーロッパに持って行って展覧会を開いてはどうでしょう」と具体的な提案を試みた。王は「検討してみましよう」といった<sup>41</sup>。

その後、一行は18日にふたたび周恩来と会談した。その場には王治秋も同席していた。周は議題の冒頭でパリでの展覧会について言及し、「われわれはあなたがたにコピーではなく本物をお目にかけていたいと思うのです。したがって計画は慎重にたてなければなりません、実施することは決めております」と展覧会実施を決定したことを明らかにした<sup>42</sup>。周は、中国政府の使節団を秋にフランスへ派遣する意向も表明し、これが急逝したド・ゴール大統領がついに訪中を果たせなかったことへの配慮であることを示唆した<sup>43</sup>。さらに周は、アメリカとの和解における前提条件として「台湾問題」の解決を挙げ、この点をポンピドー大統領に伝達するよう依頼した<sup>44</sup>。中国側によるパリ展の了承は、中国が台湾と代表権をあらそう秋の国連総会でフランスが中国の代表権を支持すること、また米中関係改善におけるフランスの後ろ盾としての役割を期待するもので、中仏関係をさらに強化していきたいとの意向の表れであった。

## 2. パリ展の準備と中国側の争点

中国側は出土文物のパリ公開を通じていかなるメッセージを伝えようとしたの

か。

周恩来によるパリ展承諾から10日後の1971年7月24日、周は「文物の海外出展とその準備チーム発足に関する報告」を承認し、国務院は翌8月、専門家の召還と育成を指示する「海外出展に向けた出土文物選定に関する通知」を發布し、本格的な準備が開始された。これを受けて、文物の集積場所とされた北京故宮内の武英殿には、文物や展覧会制作の専門家が下放先から復帰し、出展のための文物選定と収集が進められた。

外交の形勢も大きく変化していた。1971年10月25日、国連総会で中国は代表権を獲得し、翌72年2月にはアメリカ大統領のニクソンが訪中して、中国側による「一つの中国」の主張を認める「上海コミュニケ」を発表した。この訪中に先立ってニクソンは、マルローをアメリカに招聘し、中国に関する助言を仰いでいる。マルローは72年2月13日にパリを發ち、翌14日にホワイトハウスでニクソン、キッシンジャーらと会談し夕食をともにした<sup>45</sup>。マルローの人生経験や世界の多くの指導者との交流によって培われた洞察力を評価するニクソンにマルローは、毛沢東を「死を目前にした巨人」と表現し、「毛沢東が最も感銘を受けるのは、あなたが若いという点だ」と励まして、アメリカの行動を支持した<sup>46</sup>。マルローは後日、このニクソン訪中について、「中共側こそ仕掛人であり、フランスを通してそれが行われたかとさえ考えられるのです」と、フランスが米中接近の媒介として役割を果たしたことを示唆するような発言も残している<sup>47</sup>。

1972年7月初旬、北京故宮の武英殿にはフランス出展のための第一陣の文物が出そろった。その内容は実物493件、複製品27件などで、出展責任者の呉慶彤と王冶秋は7月4日付で準備状況を周恩来に報告した。この報告書では、展示品の概要について「これらの展示品がとみにあらわすのは、我われ中華民族の悠久の歴史・文化、そしてプロレタリア人民の知恵と創造です」と説明されている<sup>48</sup>。「出土文物展」は、欧米で中国美術品として親しまれてきた伝世の磁器や書画ではなく、ほとんどが地下から出現した「出土文物」で構成されていた。

この選定方針には、従来、宮廷や富裕層によって愛好されてきた芸術品としての文物とは異なる新たな価値を提唱しようとの中国側の意図が込められている。中国政府が文物の海外出展を批准した1971年7月24日、『人民日報』は文化大革命中の考古発掘の成果を、「工農兵人民の協力のもと発掘された歴史的文物は、わが国歴代の政治・経済・文化・軍事や海外との友好往来の研究や理解に重要な科学的価値を有する」と発表し、その人民の手による発掘の意義を高く評価した<sup>49</sup>。また中国側は「出土文物展」の各国での開催にあたり、その規模が1935年にロンドンで開催された「中国芸術国際展覧会（International Exhibition of Chinese Art）」以来の大きさと喧伝している<sup>50</sup>。「中国芸術国際展覧会」とは範麗雅や張

碧恵らがまとめるように、南京国民政府が故宮博物院の文物を中心にシノワズリ（中国趣味）の伝統的な中国文物を欧州に発信し、南京国民政府のポジティブイメージの形成に寄与した展覧会である<sup>51</sup>。中国側は南京国民政府による「中国芸術国際展覧会」を意識しながら、欧米で好まれる「芸術品」としての文物ではなく、あえてそれとは対抗的に、「人民」の手によって掘り出された考古学的な「出土文物」を選んでいくことがわかる。中華民国の遷台によって文物の優品の多くが台湾にわたり、宮廷由来の文物を扱うことは革命のイデオロギーにも抵触しかねない。ゆえに中国側は、出土文物を利用することで「伝統中国」とは異なる価値を提唱し、それによって台湾に遷った中華民国との差別化を図り、「革命中国」・「人民中国」という新たな自己像を見せようとしたことがうかがわれる。

### 3. 交渉のゆくえ——パリ展の開催へ

「出土文物展」のパリ展は、中国とフランスの間で多くの課題を伴った交渉の末に実現した。むしろ政治主導であるゆえにその未知の壁を突破する現場の苦労は並大抵のものではなかった。

1972年7月初旬の時点でフランス側は、1、パリのグラン・パレで73年6月から7月までフランスの「全国展覧委員会」（中国語ママ）の主権によって開催  
2、文物はグラン・パレの展示室に搬入以降、フランス側が安全に責任を持つ、という条件を中国側に提示していた。これに対して中国国内では、文物の安全を危惧する声が噴出した。外交部の喬冠華は「出展は確実にリスクを伴い、破損の可能性も考慮せねばならない。フランス政府に徹底的に責任を負ってもらわねば」と強調し、中国科学院院長等を務める郭沫若もやはり文物の損失を憂慮していた。駐フランス大使・黄鎮の言はさらなる不安をあおった。黄は「パリの社会は混乱し国際窃盗団が暗躍している。警察・官吏も結託するので簡単に展示品が盗まれてしまう。盗まれたとしても賠償保険を適用するだけである。我々大使館は責任が持てない。（パリに）行くのであれば損失は覚悟せねばならない」と言い、フランス政府が責任を負い、文化省のような機構に主催してもらい、さらに大使館と交流のあるルーブル美術館の専門家にキュレーターを依頼すべきだと主張した。中国にはこのころ7、8ヶ国から「出土文物展」巡回の希望が寄せられつつあり、最初のパリ展の段階で実施に関する規格を整備する必要があった<sup>52</sup>。

1972年末、パリ展のリハーサルとなる予備展が中国歴史博物館で始まった。「出土文物展」の海外出展にあたっては、文物ばかりでなくパネルや題箋を含めた展示一式が事前に公開され、内容の審査が行われる決まりであった。翌73年1月7日、喬冠華・馬文波・韓念龍・符浩・余湛ら外交部の副部長クラスと対外経済連絡部長・方毅、国务院の呉慶彤らが、この予備展の内見・審査を行い、その後、

若干の検討・修正が加えられて、1月9日に最終版となる400件の展示リストが確定した<sup>53</sup>。この400件の文物は、フランス展以降もヨーロッパを巡回し、やがてカナダ、アメリカへと紹介されていく。

文物の出国準備が本格化する中で、文物部門と外交部門との連携は不可欠なものになりつつあった。中国政府は王冶秋の報告に基づき、1月18日付で、まず海外出展にかかわる国内調整を担当する「出土文物展覧工作領導小組」を立ち上げ、メンバーを組長・呉慶彤、副組長・王冶秋、考古学者の夏鼐、王仲殊らとした。また対外的な実務を担う「中国出土文物展覧工作委員会」(以下「工作委員会」)を設置し、主任・王冶秋、副主任・夏鼐、ほかに王植範、蕭特、王友唐、王承礼、郭勞為をメンバーとした<sup>54</sup>。國務院を中心に外交部や文化部、対外友好協会、中国科学院考古研究所の関係者が集う形式で、国内外との交渉や調整が進められていった。

パリ展の会場は、作品の安全面が考慮された結果、中国側の希望するルーブル美術館ではなく、電子的なセキュリティシステムを備えたプティ・パレが確保された。プティ・パレは1900年のパリ万博のために建設された由緒あるミュージアムである。また監修は、チェルヌスキ美術館学芸員のヴァディム・エリセーエフ<sup>55</sup>が「総合委員(チーフキュレーター)」をつとめ、プティ・パレの学芸員がそれを補助することに落ちついた。エリセーエフはロシアの東洋学者セルゲイ・エリセーエフの次男で、父と同じく東洋学を専門とする。中国の考古学者にとっても旧知の間柄であった。パリ展終了後、文物は9月15日からロンドン・ロイヤルアカデミーで展示されることとなり、輸送や保険の費用は英仏で分担することが決められた<sup>56</sup>。完全とはいえないまでも、中国側の意向が徐々に反映されていった。

同年2月17日、調印に向けて最後の折衝にのぞむフランスとイギリスの代表団が北京入りする。フランスはAFAA(芸術活動に関するフランス協会)<sup>57</sup>理事のA・ビュルゴー、チーフキュレーターのエリセーエフ、学芸補佐のプティ・パレ美術館A・カンカン学芸員の3人、イギリスはロンドン展のチーフキュレーターW・ワトソン(ロンドン大学)、G・S・バラス(外務省)、P・A・タヴェルナー(タイムス社)、A・E・ウォーナー(大英博物館)ら10人で、中国側からこれに臨んだのは、王冶秋や夏鼐、王友唐、郭勞為、蕭特ら「工作委員会」を中心とするメンバーである。三者は19日から夏鼐が進行役となって本格的な交渉を開始した。だが議論は、協約の内容や細かな文言をめぐる紛糾し、ときに真夜中に及ぶこともあった。結果的にフランス代表団の帰国する23日までに協約書の合意に至ることはできず、残る問題はフランス大使館とイギリス側の代表団が交渉を引き継いで、三者がようやく合意に達したのは3月3日のことであった<sup>58</sup>。

パリ展については最終的に、中華人民共和国外交部・フランス外務省・フランス文化省の三者がフランスと中国の文化協定に基づいて主催者となり、実質的な運営はAFAAが担当<sup>59</sup>、企画や資金調達はフランス外務省が担当、リスク分散のために作品を2便に分けて空輸すること、220億旧フランスフランの美術品保険を付保することなどが決定された。交渉に長い時間を要したのは、これだけの規模の海外展は中国側にとって初の経験であり、契約や実務に関する前例を有していなかったからである。だがこれら欧州の一流の美術館との交渉が中国側に多くのノウハウと人脈を提供したことは間違いない。この日（3月3日）、夏鼐は感慨深げに日記に記している。「2月19日にはじまった交渉は本日午後6時ようやく終わった」と。そして中国・フランス・イギリス側から交渉に加わった全てのメンバー名を書き残している<sup>60</sup>。厳しいながらも記憶に残る交渉だったことがうかがわれる。

パリではおよそ一月前の1月27日、ベトナム戦争の終結に向けた「パリ和平協定」が締結された。アメリカ・ベトナム民主共和国（北ベトナム）・ベトナム共和国（南ベトナム）・南ベトナム解放民族戦線（NLF）が、すべての戦争行為の停止と、アメリカ軍およびその同盟国部隊のベトナムからの撤退に合意したこの協定によって、ド・ゴール以来の長年にわたるフランスの外交努力は実を結ぼうとしていた。マルロー提唱の「中国美術展」にルーツをもつ「出土文物展」のパリ開催は、時宜を得た催しとなった。

1973年5月9日、「出土文物展」のパリ展がプティ・パレで始まった。10の展示室には60万年前の藍田原人から14世紀の万暦帝期にいたるおよそ400件の出土文物が並び、これらは中国史を概観できる第一級の美術品として紹介された。前日の8日に開催された開会式には約500人が参列し、展覧会コミッティのメンバーである外務大臣のミシェル・ジョベールと文化大臣のモーリス・ドリュオン、また中国側からは王冶秋を団長とする代表团や駐フランス代理公使・田志東らが出席し<sup>61</sup>、ともに本展の意義が友好と相互理解の推進にあることを確認しあった<sup>62</sup>。チーフキュレーターのエリセーエフは展覧会図録に、中国の考古学者たちが戦後中国の政治変動にもまれながらも、あきらめることなく研究を続け、今日彼らの研究が国家の関心の最前線に置かれたことへの賛辞を記している<sup>63</sup>。

欧州に浸透する「シノワズリ（中国趣味）」とは異なる「中国」を見せる「出土文物展」は、一部の観客には「ふつうの中国美術が見たい」と不評だったが、9月3日までの期間中に約35万人が訪れ、この年プティ・パレで開かれた展覧会の中で最多の来場者数を記録した。8万部用意された図録も閉幕のかなり前に売り切れた。

前述のとおり、マオイズムの影響によって、フランス人の中国文化に対する関

心の高まりは、リベラルな立場の表明と表裏一体に、人々の複雑な政治的信条の表れとなっていた。たとえば『ル・モンド』紙は、フランスの美術館に既存の中国美術品には「起源」や「歴史」が欠けているのに対して、中国の文革によって見いだされた「出土文物」は、考古学的な価値を持ち、「中国美術についての我々の考えを一新する」と評価した<sup>64</sup>。またパリ展が高額な費用をかけて「国家的に実現」されることも、中仏関係進展のための必要な投資として、比較的肯定的に扱っている<sup>65</sup>。そうした評価は、中国の政治思想への理解と見なすことも可能である。一方で同紙は、出土文物の「神話性」に関心を抱きながら、その新奇さを、「芸術的視点からいえば、この展覧会は新領土を発見するように新しい中国を我々に見せている」と表現している<sup>66</sup>。こうした視角はある種のオリエンタリズムと称しうるもので、パリ展の人気は、フランスの人々のリベラルな心情とともに、未知の中国に対する好奇心によって生み出されていたといえる。

中国側では、パリに随行した中国の展覧会スタッフが、初日は1万3千人余り、最初の一週間で3万7千人もの観客が会場に押しかけ、その影響はすさまじい、と本国への報告書に記し<sup>67</sup>、6月10日に現地を視察した夏鼐は、開館前から観客が列を作るほどの人気ぶりに驚き、展覧会の手ごたえを実感している<sup>68</sup>。展覧会の成功を受け、中国は「出土文物展」によるさらなる影響力の拡大を目指した。パリ展の最中の8月13日、周恩来は外交部副部長・余湛と王冶秋に、「出土文物展」巡回のために複数の展示品パッケージを用意し、カナダ・アメリカ・メキシコ・南米の国々・ルーマニア・オーストラリア・イラン・シリア・パキスタンなど多くの国々で開催することを指示し、また会期を交渉中のアメリカには、時期や内容を吟味の上、パッケージを選んでもらってはどうか等の提案を行った<sup>69</sup>。「出土文物展」の開催は多くの国々の関心を集め、対話開始から間もないアメリカとの交流の媒介にもなりつつあった。外交上の成果はもはや明らかであった。

## おわりに

「出土文物展」パリ展が1973年9月3日に閉幕した一週間後の9月10日、フランスのポンピドー大統領が中国を訪れた。中国側は大々的にこれを迎え、大統領を特別に雲崗石窟に案内するなど両国の友好を演出した。

中国政府が1973年から世界各国で開催した「出土文物展」は、1965年に中国を訪れたフランスの文化大臣アンドレ・マルローによる「中国美術展」の提案にルーツをもつ。マルローによる展覧会の提唱は、冷戦構造下にインドシナ問題の解決をめざしたド・ゴール外交の一環で、またフランス国内の対中世論の改善を企図しての計画であった。その実現は、冷戦下に文化交流を通じて中国との関係

を深めようとしたフランス独自の外交戦略の具現化だったといえる。

中国側も、フランスとはインドシナ中立化に対する意見は異なれども、1964年の中仏国交樹立以来、国連での中国支持を貫くフランスと、フランスの国際社会に対する影響力を重視し、ド・ゴールやマルローにも敬意をはらっていた。71年にペイルフィットによる出土文物のパリ公開の提案にすぐに合意したのも、中国政府のこうしたフランス重視の表れであり、そこには、これまで通説とされてきた米中関係を主軸とする中国外交史とはフェーズの異なる中国外交の一側面を垣間見ることができる。

「出土文物展」の組織にあたって中国側は、フランスとの修好だけでなく、台湾の国民党政権と対抗的に自国の正統性を国際社会に強調することを企図した。そのため、かつての中華民国が国際社会に発信したような伝統的な中国美術ではなく、それを超越するような「革命中国」や「人民中国」としてのイメージを出土文物に付与した。

「出土文物展」に陳列されたこうした文物の政治的屬性は、折しもマオイズムの影響で中国への関心を高めたフランスの人々に受け入れられ、そこには彼らのオリエンタリズム的な視角も加わって、パリ展に一定の盛況をもたらした。

中国側にとっても、展覧会に対する反響の大きさは十分に成功と見なせるものであった。また「出土文物展」はフランス側の要請によって準備が始まったものの、その実施は文革によって追われていた専門家（知識人）を復活させ、各国との交渉や展覧会の開催を通じて実質的な知的・人的交流を育むという想定を超える結果をもたらした。さらに、この成功は中国の文化交流のスタイルにも影響を与えた。すなわち自国の出土文物を用いた大型の美術展の輸出が、中国の対外文化交流の主要な手法となっていくのである。この「大型展」というスタイルは、まさしくマルローが得意とした交流かつ宣伝の手法であった。

ド・ゴールの密命を帯びて冷戦下に中国に渡ったマルローの一つの提唱は、ベトナム戦争の終結によって政治的な役割を終えつつも、当初の思惑とは異なる形で発展をとげたということになる。

## 注

- 1 マルローの実際の訪中経験は、1925年の香港数日と31年に日本に行く途中に立ち寄った北京、天津のみであり、北京滞在は2週間程度だった。村松剛『評伝アンドレ・マルロー』（新潮社、1972）、199-205。
- 2 アンドレ・マルロー著／竹本忠雄訳『回想録（下）』（新潮社、1977）
- 3 辻直美「馬王堆ブームに見る中国文物の位相と日中国交正常化：「中華人民共和国出土文物展（1973）」の開催を背景に」『中国研究月報』908（2023）
- 4 高嘉懿『敵友之辨：跨陣営交往下の中法関係（1949 - 1969）』（香港：開明書店、2024）；同「直面紅色中国：法国国内対中法建交的態度」李丹慧編『冷戦国際史研究』第19・20

- 卷(北京:世界知識出版社、2015)
- 5 余汝信「文革前夕中法間一次重要対話——1965年8月毛沢東会見馬爾羅」『昨天』第115期(2018)、26-39.
  - 6 前掲註1、村松剛:ほかマルロオ著/小松清訳『東西美術論』第3(新潮社、1958)、219-227; 中野日出男『アンドレ・マルロー伝』(毎日新聞社、2004)、150-165; 森脇善明『アンドレ・マルロー美術史論研究:「空想の美術館」光と影』(晃洋書房、2012)、127-129; 永井敦子・畑亜弥子・吉沢英樹・吉村和明編『アンドレ・マルローと現代』(上智大学出版、2021)などを参照。
  - 7 ハーバート・ティント著/藤木登訳『現代フランス外交史』(御茶の水書房、1977)、202-205.
  - 8 前掲註1、村松剛、365.
  - 9 『ミロのビーナス:特別公開』(朝日新聞社、1964)、5(駐日フランス大使挨拶)。展覧会の会期・会場は1964年4月8日-5月15日・国立西洋美術館、同5月21日-6月25日・京都市美術館
  - 10 前掲註9、『ミロのビーナス:特別公開』、5-7; 衣奈多喜男『沈黙の使者たち』(新潮社、1980)、15-67.
  - 11 陶山伊知郎『近代日本美術展史』(国書刊行会、2023)、151-168.
  - 12 鳥潟優子『ベトナム戦争と仏米同盟:「中立化」構想をめぐるドゴール外交の展開』大阪大学博士論文(2003)、同「ドゴールの外交戦略とベトナム和平仲介」日本国際政治学会編『国際政治』156「国際政治研究の先端6」(2009); 森聡『ヴェトナム戦争と同盟外交:英仏の外交とアメリカの選択1964-1968年』(東京大学出版会、2009)
  - 13 前掲註4、高嘉懿『敵友之辨』、173-263; 福田円『中国外交と台湾』(慶応義塾大学出版会、2013)、306-331; 前掲註12、鳥潟優子
  - 14 程宜思「従馬爾羅看法国文化政策」『世界知識』1962年第14期、16-17.
  - 15 Red China: The Mysterious Visitor, *TIME*, August13, 1965. <https://time.com/archive/6628025/red-china-the-mysterious-visitor/> (2024年8月10日確認)、「訪日の途につく マルロー仏文化相」『朝日新聞』夕刊1965年6月23日、1面。マルローの日本行きは、「ミロのビーナス展」の主催者・朝日新聞社の招聘で、同社の衣奈多喜男や萩原徹・駐仏大使が準備していたとの説がある。竹本忠雄『マルローとの対話:日本美の発見』(人文書院、1996)、457-458.
  - 16 「マルロー氏は無事 衝突のカンボージュ号」『朝日新聞』1965年7月14日、14面
  - 17 Jean Lacouture, *André Malraux: une vie dans le siècle*, (Paris: Seuil, 1973) 384-385.
  - 18 M.Malraux se rend a pekin, *Le Monde*, juillet20,1965; 「仏国務相 広東に到着」『朝日新聞』1965年7月20日、3面
  - 19 前掲註15、竹本忠雄
  - 20 王泰平編『中華人民共和国外交史』第2巻(上海:世界知識出版社、1998)372-373; 前掲註5、余汝信
  - 21 前掲註12、鳥潟優子(2003)、96.
  - 22 前掲註20、王泰平編、373; Chinese Foreign Ministry Circular, Malraux's visit to China, August12, 1965, Wilson Center digital Archive.
  - 23 M.Malraux compte s'entretenir avec les dirigeants chinois, *Le Monde*, juillet22, 1965.
  - 24 Entretien Malraux -Chou En-lai, *Le Monde*, août3, 1965.
  - 25 前掲註22、王泰平編、374.
  - 26 前掲註17、Jean Lacouture, 387.
  - 27 家永真幸『国宝の政治史:「中国」の故宮とパンダ』(東京大学出版会、2017)、180-183.
  - 28 前掲註4、高嘉懿「直面紅色中国」
  - 29 前掲註4、高嘉懿『敵友之辨』305-306.
  - 30 前掲註5、余汝信:「接見法国事務部長馬爾羅時的談話」宋永毅編『機密档案中新發現的毛



- 沢東講話』(国史出版社、2018) ; 「接見法国事務部長馬爾羅時的談話(一九六五年八月三日)」 August 3, 1965, Conversation from [Mao Zedong's] Audience with the French Minister of [Cultural] Affairs, [Georges André] Malraux, Wilson Center digital Archive; M.Malraux recu par le president Mao Tsu-Tong, *Le Monde* août4, 1965, 2; 前掲註 17, Jean Lacouture, 384.
- 31 André Malraux : Mes conversations avec Mao Tsé-Toung ont été un dialogue sur les problèmes du temps, *Le Monde*, août9, 1965, 14.
- 32 蔡武「新中国六十年对外文化工作發展歷程」『中国文化報』2009年7月30日、「中法文化交流執行計画簽訂」『人民日報』1965年10月5日第4版、「中仏文化協定に調印」『朝日新聞』1965年10月3日、4頁
- 33 Franco-Chinoises prévoient une importante intensification des échanges, *Le Monde*, octobre2, 1965.
- 34 リチャード・ウォーリン著 / 福岡愛子訳『1968パリに吹いた「東風」—フランス知識人と文化大革命』(岩波書店、2014)
- 35 「日仏外交関係 日仏定期協議関係 第9回関係」(外務省外交資料館100-017001)20頁; 「世界は動く: 歩み寄るフランス・中国」『朝日新聞』1970年8月12日、19面; La France attache une grande importance au développement de ses relations avec la Chine populaire déclare M. André Bettencourt, *Le Monde*, juillet10, 1970; M.Bettencourt a Pékin, *Le Monde*, juillet18, 1970; 「法国政府代表团团长和大使举行答谢宴会」『人民日報』1970年7月14日第2版; 「平和五原則による国家関係の發展を(RP = 東京)」『朝日新聞』夕刊1970年7月9日、2面。
- 36 Report of the Meeting on Monday July 13, 1970, at the Great Hall of the People, <https://digitalarchive.wilsoncenter.org/document/report-meeting-monday-july-13-1970-great-hall-people>.
- 37 前掲註 12、鳥潟優子(2003)、4-20.
- 38 アラン・ペールフィット著 / 杉辺利英訳『中国が目ざめるとき世界は震撼する』(白水社、1974) ; La délégation parlementaire française a été chaleureusement accueillie tout au long de son séjour, *Le Monde*, août 2, 1971.
- 39 同アラン・ペールフィット、94-101.
- 40 ヘンリー・キッシンジャー著 / 桃井眞監修『キッシンジャー秘録3北京へ飛ぶ』(小学館、1975)、196.
- 41 前掲註 38、アラン・ペールフィット、104.
- 42 同上、101-105.
- 43 「広く国際的にデモ: 中国代表団の仏派遣」『朝日新聞』1971年7月20日、7面
- 44 前掲註 38、アラン・ペールフィット、106-112.
- 45 President Richard Nixon's Daily Diary, February14, 1972, Richard Nixon Museum and Library, <https://www.nixonlibrary.gov/sites/default/files/virtuallibrary/documents/PDD/1972/069%20February%201-15%201972.pdf>.
- 46 192. Conversation Between President Nixon and his Assistant for National Security Affairs, <https://history.state.gov/historicaldocuments/frus1969-76v17/d192>; リチャード・ニクソン著、松尾文夫、斉田一路訳『ニクソン回顧録』①(小学館、1978)、323-325.
- 47 前掲註 15、竹本忠雄、96-97.
- 48 「1972年7月、呉慶彤與王治秋就拳辦出土文物展覽事上報周総理的《關於準備赴法展出的我国出土文物展覽籌備情况的報告》」中国文物交流中心編『光荣使命—中国文物交流中心四十年』(北京: 文物出版社、2011)、20.
- 49 「我国在文化大革命中發掘出大批珍貴歷史文物」『人民日報』1971年7月24日、第1-2、4版。
- 50 「古為今用: 中国の考古文物⑤」『朝日新聞』1973年5月25日、7面; La Chine nouvelle découvre la Chine immémoriale, *Le Monde*, mai 9, 1973.

- 51 「中国芸術国際展覧会」は1935年11月28日から翌36年3月7日、ロンドンのバーリントン・ハウス (Burlington House) で開催。範麗雅『中国芸術というユートピア』(名古屋大学出版会、2018)、10-26; 張碧恵『中華民国と文物』(早稲田大学出版部、2019)、211-216.
- 52 「關於準備赴法展出的我国出土文物展覽籌備情况的報告」前掲註48『光栄使命』、20.
- 53 夏鼐『夏鼐日記』卷七(上海:華東師範大学出版社、2011)、321-325.
- 54 王可『王冶秋伝:一個伝奇人物の一生』(北京:文物出版社、2007)、233-234.
- 55 ヴァディム・エリセーエフ(1918-2002):ロシアのペトログラード生まれ、1920年のロシア革命時に一家でパリに移住。第二次大戦中は外交官として中国に滞在し、戦後1949年から日本に滞在。1956年からパリのチュルヌスキ美術館、82年から86年までギメ美術館の館長を務めるとともに、中国・日本など極東の美術・文化の紹介に業績を残した(ヴァディム・エリセーエフ、ダニエル・エリセーエフ著/桐村泰次訳『日本文明』論創社2013)。
- 56 Quatre cents fleurs de Pékin, à Paris, *Le Monde*, mai4, 1973.
- 57 AFAA(Association Française d'Action Artistique):フランスの芸術活動と芸術的遺産を国外に紹介するべく、芸術家・外交官・企業のメセナ担当者らによって1922年に結成された公的機関(1923年活動開始)。フランス外務省において決定された文化外交政策を、文化省・海外協力省との協議に従い、芸術交流の分野で運営する。『現代美術用語辞典1.0』[https://artscape.jp/dictionary/modern/1198158\\_1637.html](https://artscape.jp/dictionary/modern/1198158_1637.html)(2024年8月16日確認)。
- 58 前掲註53、『夏鼐日記』、330-334; ロンドン展関係者は次を参照、*The Geinius of China: An exhibition of archaeological finds of the People's Republic of China* (London: Times Newspapers Ltd, 1973) .
- 59 *Trésors d'art chinois: récentes découvertes archéologiques de la République Populaire de Chine* (Paris: Petit Palais, 1973) .
- 60 前掲註53、『夏鼐日記』、330-334.
- 61 前掲註50, *La Chine nouvelle découvre la Chine immémoriale*; 「<中華人民共和国出土文物展>在法国展出簡況」前掲註48、『光栄使命』、30.
- 62 前掲註59, *Trésors d'art chinois*.
- 63 同上
- 64 Le Petit-Palais sans “chinoiseries”, *Le Monde*, septembre 7, 1973.
- 65 前掲註56, *Quatre cents fleurs de Pékin*, à Paris.
- 66 前掲註64.
- 67 前掲註61、「<中華人民共和国出土文物展>在法国展出簡況」
- 68 前掲註53、『夏鼐日記』、367.
- 69 「出国文物展覽可設兩個方案」前掲註48、『光栄使命』、21.

### 謝辞:

フランス語の解釈に、芹沢明美・飯竹恒一両氏の協力を得た。またフランスの文化交流について、尾本圭子氏、フランソワ・ラショー氏、秋山光文氏、秋山康男氏のアドバイスを頂戴した。ここに記してお礼を申し上げる。

Abstract

# Andre Malraux's ideal and "The Archaeological Treasures Excavated in the People's Republic of China" : The Effects of Sino-French Cultural Exchange during the Cold War

Naomi TSUJI

The holding of "The Archaeological Treasures Excavated in the People's Republic of China," which was organized by the CCP government and started a touring exhibition around the world in 1973, originated from André Malraux's, a French Minister of cultural affairs who visited China in 1965, during the Cold War, advocacy of "the Chinese Art Exhibition." Besides the reasons that Charles de Gaulle, the 18th president of France, intended to improve the diplomatic relationship with China to end the Vietnam War, Malraux's advocacy of this exhibition also reflected his interest in the Chinese civilization, Communist China, and his ideal of the exchange between different civilizations. On the CCP side, notwithstanding a different opinion about Indonesia's neutrality between China and France, since it has restored the diplomatic relationship with France, the CCP government regarded France, which approved the CCP's international legitimation in the United Nations, as an important partner. The CCP government felt optimistic about Malraux, who processed a deep "relation" with China. Due to this, the CCP rapidly agreed with Alain Peyrefitte's advocacy in 1971 and showed their respect towards the diplomatic attitude of the French government. However, the CCP government's intention was chiefly to emphasize its legitimacy against the KMT government in Taiwan. Different from the Chinese Art "Chinoiserie," which was propagated by the Republic of China before, the CCP government tried to renew the international communities' impression towards China by displaying the image of "the Revolutionary China" and "the People of China" through the exhibition of the archaeological treasures.

